

## ヘゲモニック・マスキュリニティで読む『蠅の王』

宇津 まり子

(人文社会科学部)

今となつては2度の映画化、数々の戯曲化を経て永続的人気を誇る *Lord of the Flies* だが、1954年の初版時の発行部数は3,000部に過ぎなかったという。E. M. Forster が「今年の素晴らしい小説」にあげたことで徐々に注目を集め、1963年の Peter Brook 監督・脚本による最初の映画化を経て、「突然、友人の親たちが父に興味を持ち始めたことに気づいた」と William Golding の娘は語っている (McCrum)<sup>1</sup>。娘をインタビューした Robert McCrum は、1980年代に Faber & Faber に勤めており、当時『蠅の王』は「毎年、10万部ずつ重版していた」と振り返っている。1990年には Harry Hook 監督による2度目の映画化が行われ、2017年には Scott McGehee と David Siegel によって少女版が作られることが発表され、Twitter 上で大騒動を巻き起こした<sup>2</sup>。世代を超え、現在に至るまでこの作品の文化的プレゼンスが極めて高いことを物語っている。

しかし、驚異的な販売部数や時代を追う新たな映画化といった現象は、必ずしも文学研究の隆盛と同期していない。James R. Baker によれば、第二次世界大戦の生み出した幻滅の文学として1960年代に急速にキャンノンの位置づけを獲得した『蠅の王』は、続く対抗文化の世代によって瞬く間に排除されたという。彼らにとってゴールディングは「古典的悲劇作家、悲観論者、原罪を超越することを許さないキリスト教的道德主義者」であり、『蠅の王』は知的洗練や現代的意義に欠ける見えすいた作品、小中学生に相応しい読み物とされていった (311)。

批評家たちが下したこういった評価は、ゴールディング自身の言葉によるところが大きい。1962年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校に招かれた際の講演で、ゴールディングは『蠅の王』が寓話であることを明言している (“Fable” 40)。第二次世界大戦での従軍経験で失われた人間存在への信頼、殊にユダヤ人虐殺がまさに「文明の伝統を背負う男たち、医師や法律家という学識ある男たちによって、巧妙に、冷血に行われた」という事実を受けた衝撃がこの作品の根底にあり、人間の原罪と墮落がその主題であると明かしている (41)。ゴールディング自身がそれを企図したとは思われないが、彼は形式とテーマをこのように固定してしまい、作品解釈の「その後」の部分のみを読者に託す形になった。

<sup>1</sup> 英語文献からの引用は、本論文執筆者による翻訳である。また、出典を示す ( ) では *Lord of the Flies* は LF と省略した。

<sup>2</sup> Hillary Busis の2020年の記事によれば、マクギーとシーゲルの少女版の計画はこれで頓挫したが、新たな映画化という試みは計画としては残っているという。

特に寓話について言えることだが、最終的に重要なのは、その形式を用いるという実践ではなく、分析するという実践だということを忘れてはならない……寓話がそれ自体の命を持ち始めたとき私が感じるその瞬間、それはもっと価値あるものになり、それゆえ、私が失敗だと感じた箇所は、実は成功している箇所なのかも知れない。この点の検討は、この物語が何を意味しているのかを講演や論文を通じて私に説明してきた、知識と情熱にあふれた多くの人々に任せたいと思う。(45)

高本孝子も述べている通り、この小説の批評が「寓話的構造を支えているアレゴリーの分析」と「アレゴリーの核となる隠喩の分析」に集中してきた(31)のにも、こういった背景がある。

先にあげたバイカーは、対抗文化世代による拒絶の理由を「ゴールディングは政治に無関心で、政治的手法を信じていないように見えた」(311)ためだと説明している。しかし、この作品の宗教性や寓話性が即、非政治性を意味すると考えるのは拙速というものだろう。本論文では、R. W. Connellによるヘゲモニック・マスキュリニティの概念を取り入れ、『蠅の王』がいかにマスキュリニティの体制を描き、ジェンダー体制の痛烈な批判となっているかを論じていきたいと思う。

この作品を寓話であると前提し、隠喩の使用も含めた記号の意味の拡散という現象を分析しようとする試みには、ある時点で矛盾が生じてくる。この点を示すため、1965年のE. C. Bufkinの論を中心にして先行研究を見ていきたい。Bufkinは、

ゴールディングはギリシア古典に真剣に取り組んだ人でもあり、エウリピデスは彼の文学に影響を与えた1人だと言っていることを考えれば、『蠅の王』で用いられる主要な技術的装置がアイロニーであることは驚くべきことではない(40)

と指摘し、この作品の中心的手法である寓話、アレゴリー、サイン、シンボルに、アイロニーという観点を加えている。例えば『蠅の王』の終盤、島に現れた海軍士官はR. M. Ballantyneの*The Coral Island*の名を口にする。船の難破を生き延びた少年たちが、互いに協力し、信頼を深め合い、未開の島で幸福で秩序立った生活を送るという、パラダイスの理想主義的なヴィクトリア朝の少年物語である。そこからおよそ1世紀を経た『蠅の王』は、同様に島に残された少年たちを設定し、しかも中心人物のうちの2人、RalphとJackの名前を共通させた上で、彼らが協力関係も信頼も失い、生活どころか生命まで破綻させていく展開を取る。両作の「対照は、効果としても意図としてもアイロニカル」(Bufkin 41)であり、ゴールディングはバランタインの提起する理想主義に強烈な異議を唱えるとともに、未開の

地に文明の知をもって対峙するロビンソナード・ジャンルの意味合いも大幅にずらしていると言えるだろう。

アイロニーを効果的に働かせ、記号に一般的に付された意味合いを崩していく試みを、バフキンは他にもふんだんに指摘している。物語冒頭、揃いのマントと帽子を身につけて登場するジャック率いるグループは、母国では、天使のように天使の歌を歌う聖歌隊であった。島では彼らはハンターに変わり、その歌は「豚を殺せ。喉をかつ切れ。血を流せ」(LF 75)の連呼に変わる(43)。植物と豊富な果実に恵まれ、人間を襲うような動物もおらず、海は珊瑚礁に守られた楽園のような人跡未踏の島の「最初の男」だったと言える少年たちが、地獄の墮天使へと身を落としてしまうこと(45)。無邪気な少年たちに相応しい“play”という語が、蠅の王が Simon に「走って行って、他の子たちと遊びなさい」(LF 158)と命じるに至っては、「遊び」は同胞によって殺されるということの意味する点(45)。物語の最後には、既にサイモンと Piggy の2人を殺害し、ラルフの命までも狙って追い立てていた少年たちを目の当たりにして、海軍士官は「イギリスの少年の一団」(LF 222)と、何の違和感を持つこともなく認識している点(50)。いずれの例においても、バフキンは記号とその意味内容が巧みにずらされることで、アイロニーが構成されている様を分析している。『蠅の王』には、会議を招集するとともに、持ち手に発言権を保障する法螺貝、幼い子供たちが夜の闇に怯える中で幻視し始め、やがて実体を持ち始める獣、狩った豚の頭を槍に挿して地面に突き立て、獣への供物とした蠅の王など、強力なシンボルが存在するが、これら記号とその意味の生成、変化、崩壊に着目する分析は、小林亜希や Yasunori Sugimura も試みている。

バフキンも含め、おそらく最も多くの批評家が指摘しているアイロニーは、少年たちが、忘れてしまうことは多々あったとしても、輪番を組んで炊いていた狼煙が一切効果をあげなかった一方で、ラルフの逃げ道を塞ぎ、山から炙り出すために放った火が、最終的な救助へと繋がったことだろう。またこれと関連して、そもそも戦争を逃れるため、疎開のために飛行機に乗せられた少年たちが、自ら戦争状態を作り出していただけでなく、救助者である海軍士官自身が戦争に従事する者であり、少年たちは軍艦に他ならない巡洋艦に乗せられ、戦争の真っ只中にある世界へと救われていくという状況は、究極のアイロニーだと言える。

ハンターと化した少年たちが、経験を積むに連れて武器を增强し、技を磨き、残虐さを増していく様は明らかである。木陰で休む豚の群れの中から、「大きく膨らんだお腹が、眠ったり、潜り込んだり、鳴き声をあげたりしながら連なる仔豚に縁取られた」(148)母豚をわざわざ標的に定めて一斉に槍を投げ、仕留める。島を襲った激しい雷雨への「恐怖心から湧き上がった別の欲望」(168)に駆られて集団でサイモンに襲いかかり、集団的恐怖の対象となっていた「獣」に見立て、殺害する。ハンターの集団に眼鏡を奪われ、歩行すら困難になったピギーには、崖の上に用意してあった巨石が落とされ、彼は12メートルの崖から落下し、

海面に出た岩に打ちつけられて死亡する。最後の標的となったラルフには、それまでの経験で磨き上げられた戦術の全て——崖の上に配備された巨石、両端を削って尖らせた槍、入念に練られた包囲作戦と「飛ぶ鳥の鳴き声のような叫び声」（211）によるコミュニケーション、そしてピギーから奪ったメガネとともに入手した火——が向けられた。

彼らの暴力性、残忍性を急速にエスカレートさせていくものは、一体何なのか。海軍士官を前に、安堵感で脱力したラルフの描写とともに、簡潔に説明される。

そして少年たちの真ん中で、体は汚れ、髪はべったりし、鼻もかまないまま、ラルフは無垢の終わりに、人間の心の闇に、ピギーと呼ばれた真の、賢明な友人が宙を落ちていったことに涙した。（223）

作品は「人間の心の闇」としか呼ばないため、その起源についての分析を試みようとする批評もある。ゴールディング自身に第二次世界大戦の経験があることに着目し、北岡一弘は、大戦に向かう極度の社会不安が投影された、不安で不安定な人間の行動と位置づけ、また Yutaka Okuhata は、この作品をトラウマ化する戦争の恐怖を描き出そうとする試みだと論じている。だが、対抗文化世代が貼りつけた「キリスト教的道德主義者」というレッテルから判断するなら、この作品の「人間の心の闇」とは、一定の状況や時代に限定されない、全ての人間がその内に抱える悪を意味していると考えるのが一般的だろう。バフキンも、それまでの批評は John Milton の *Paradise Lost* が『蠅の王』に与えている強い影響を看過してきたことを指摘し、両作の共通テーマは「人間の墮落」だと論じている（42）。

キリスト教由来の「人間の墮落」であるならば、それはどの人間であっても、一人一人が内に抱える墮落であるはずだが、バフキンの論ではここに捻りがある。全ての人間に共通する墮落をこの作品がいかに表現しているかを論じるにあたり、彼は Carl Gustav Jung の *Modern Man in Search of a Soul* に展開される4つの心理タイプを参照している。それぞれ、感覚、直感、思考、感情だが、バフキンはこれらを順にジャック、サイモン、ピギー、ラルフに当てはめ、次のように説明する。

このように人間の4つの心理的タイプを包括的に表現することで、『蠅の王』は残酷で暴力的で血生臭い物語の中の4人の少年を描いているのではない。そうではなく、4人は人間存在というものが持つ複数の側面の1つに過ぎないのである。ゆえに、4人の少年の視点は、オムニプレゼンタな語り手によって提示され、統合される形をとる。（54）ゴールディング自身が寓話だと断言したことの縛りがここに現れているように思う。特定の性質・性格が登場人物ごとに体现されているとする批評の傾向は強く、1982年の鈴木敬子も

Ralph は、最初から最後まで、秩序正しい文明人であろうとしたのであり、それが次第に野蛮化して行った Jack と相容れなかった原因のひとつと言えよう。彼は、常識派でモラリストであり、chief に相応しい少年であった (41)

と評価している。2020年まで時代を下った Stefan Alidini も、ラルフとジャックのリーダー性は、「それぞれに付与された価値観と、それぞれが体現する原理に基づく」もので、それは「理性と力だ」(222)と論じており、この傾向が1960年代のバフキンから現在まで、研究者に引き継がれていることが分かる。

墮落と道徳、秩序と混乱、文明と野蛮といった二項対立的に対置される性質や特性が、特定の登場人物に当てはめられるわけだが、少年たちをこのように捉える限り、彼らは一人の人間としての多面性や状況に応じた変化を含み込むラウンドな登場人物であることを阻まれた、フラットな存在でなければならないだろう。しかし、彼らを取り巻く環境や状況では逐次、記号の意味が揺れ動いているその時に、そこにいる人間が不動であることは可能なのだろうか。ジャック、ラルフ、ピギーといった記号もまた、変わっていくものではないか。

この違和感を解消するために導入したいのが、ヘゲモニック・マスキュリニティという概念である。R・W・コンネルが中心となって創出された男性性を捉えようとする社会学起源の概念だが、「ヘゲモニック・マスキュリニティ」という用語としては、学術分野に限らず、一般的にも盛んに使われるようになっており、コンネル自身が意図した意味合いから大きく外れた用例も散見されるため、まずは概念の整理を行っておきたい。

コンネルのマスキュリニティ概念の第一の特徴は、複数のマスキュリニティの間の関係性に注目するところにある。近年、ジェンダーは人種や階級と相互に作用するものだという認識が広く共有されるようになってきているが、その一方、黒人のマスキュリニティとして1つ、労働者階級のマスキュリニティとして1つといった具合に、逆に固定化されていく傾向も見られるという。そして固定化傾向の中では、「男らしさ」を表す性質や性格の特質を列挙することに主眼が置かれる風潮があることをコンネルは懸念する。

分析が動的であり続けるため、そして性質の類型化に陥ってしまうことを回避するためにも、男性間のジェンダー関係に焦点を当てることが必要である。……権威主義的パーソナリティの研究で起ったことは、まさにこれだった。「ヘゲモニック・マスキュリニティ」は、常にどこでも同じというような、固定化された性格類型ではない。それはむしろ、あるジェンダー関係のパターンにおいて、覇権的な位置を占める男性性であり、その地位は常に争われるものである。(76)

ジェンダー研究が観察の対象とすべきものをこのように設定した上で、コンネルはマスキュリニティの4分類——覇権、従属、共謀、周縁化<sup>3</sup>を提示する。中心的な位置を占めるのが、もちろんヘゲモニック・マスキュリニティであり、覇権は以下のように説明される。

覇権とは、ある集団が社会生活の中で主導的地位を主張し、維持する文化的ダイナミズムを指す。いつの時代でもある種の男性性が文化的に高く評価されてきた。覇権的男性性とは、家父長制を正当化するという課題に対し、その時に最も受け入れられている答えを具現化したジェンダー実践と定義することができ、それは男性の支配的地位と女性の従属を保障する（あるいは保障すると考えられている）ものである。(77)

そのような覇権的マスキュリニティに対し、従属的地位に置かれるマスキュリニティが存在する。現代の欧米社会で言えば、異性愛男性の覇権に対する同性愛男性の従属があげられるが、そもそもジェンダー体制は女性の従属の維持を最終目標とするため、女性性との象徴的な近接、つまり性格や振る舞いの「女々しさ」や女性養育者との緊密な関係性などは従属の「印」となり、異性愛の少年や男性であっても、従属的地位に置かれていじめや疎外の対象になる(78)。

しかし実際のところ、中心的概念である覇権的マスキュリニティに該当する基準を満たすような人は極めて限定的であるという点が興味深い。該当しない、大多数を占める男性は、女性の包括的従属という企てに直接、積極的に関与するわけではないが、直接的行動を取らないことで共犯関係を持ち、それによって男性一般の優位性をもたらす家父長制の配当を得る。この種の男性性が、共謀的マスキュリニティである(79)。ジェンダー秩序の内部に限定すれば、マスキュリニティは、覇権、従属、共謀の3種に収まる。しかし前述の通り、ジェンダーは階級や人種といった他の構造と相互に作用するため、これら差異化軸による支配／被支配の関係性に言及するのが、最後の周縁化という概念である。周縁的マスキュリニティは、覇権的マスキュリニティの権威づけに関係しているとコンネルは説明している(80-81)。

ヘゲモニック・マスキュリニティは、特定の性格・性質を指すのではなく、他のマスキュリニティとの関係性を表す概念である。その時々で、文化的優勢を得たマスキュリニティのあり方が覇権の地位に置かれ、そして別様のマスキュリニティからの挑戦を常に受け、転覆、変容していく様態を捉えようとするのがこの概念の主眼であると言える。以下では、この視点から『蠅の王』の少年たちの関係性について検討し、その上で地面に突き立てられた豚の頭である「蠅の王」の意味をジェンダーの観点から解釈する。

<sup>3</sup> 原語ではそれぞれ hegemony, subordination, complicity, marginalization である。

先行研究では、「野蛮」なジャックと対置させられたラルフが、文明、道徳、理性の体現者として把握されてきたことは先に見た通りであるが、少年たちの性格ではなく、互いの関係性に焦点を移すことで異なったものが見えてくる。物語冒頭、飛行機から脱出して着地したそれぞれの場所から少年たちは姿を現し始める。「金髪の少年」(7)として登場するラルフが、「幅があり、しっかりとした肩からは、良いボクサーになりそうなのが窺えるが、口元と目元には残忍さは一切なく、優しさが漂っていた」(11)と描写される一方で、ピギーは分厚いメガネをかけた極度の近視で、体は肥満している(7)。「喘息があるから……おばさんに走っちゃいけないと言われているんだ」(9)と説明する通り、彼の身体機能には制約があり、俊敏な運動能力を示唆するラルフの規範的身体には遠く及ばない。また、扶養者である叔母への度重なる言及は、彼と女性扶養者との間に存在する緊密な関係性を物語っており、ピギーが身体的にも精神的にも自立を果たしていない「女性的」存在であることを示している。コンネルの分類に従えば、彼は明らかに従属的マスキュリニティの位置に置かれていると言えるだろう。

同じジェンダー体制の中にいるラルフは、この事実に敏感に反応している。出会って間もなく、社会的儀礼に則ってピギーはラルフに名前を聞いている。ラルフは自分の名を教えるが、知り合いになろうとするピギーの申し出は一方通行にとどまり、彼に名乗る機会は与えられない(9)。やがてピギーは、自分が学校ではピギーと呼ばれていたこと、この新しい環境では、もうその名では呼ばれたくないことを打ち明けるが、ラルフは豚と呼ばれることの屈辱を想像しようとしなないどころか、「ピギー」と連呼して大笑いし、侮辱の対象にしてしまう(11-12)。それだけに留まらず、ジャックなど他の少年たちも集まった後、ジャックが「デブ(“Fatty”）」と彼を呼ぶと、「いや、彼の本当の名前はピギーなんだ」(23)と、ピギーが隠しておきたかった渾名をグループ全体に率先して差し出してしまふ。

ラルフのこの行為には文化的機能があることも、作品は明瞭に示している。彼の吹いた法螺貝の音を聞きつけて、少年たちはラルフの元に集まり、初顔合わせとなる場面での出来事だった。ピギーの恥じるそのあだ名を公表すると、一同には

笑いの嵐が起こり、一番小さな子供すらそれに加わった。少年たちは共感にあふれた閉じた輪を形成し、ピギーはその外に置かれた。(23)

ピギーが島に来る前につけられたこの渾名を避けたかったのは、名前そのものが侮辱的であるためだけでなく、その名に付随するグループ内での位置づけを十分に承知していたためでもある。遭難しているとはいえ、新しく顔を合わせる人間関係の中に投げ込まれたことをピギーは好機と捉え、そしてラルフの悪意によって、その期待はいとも簡単に潰えた。ピギー

という「外」を作り、他者とすることで、残りの少年たちは同質性のフィクションを作り出してまとめ、こうして「仲間」が作り出された直後、彼らの信任を得て、ラルフは少年たちのチーフに選出される。『蠅の王』の第一章は、学校や近隣、家族など、それまでの人間関係から切り離された少年たちが、新しい面々で相互を配置する様子を描くものだ。ピギーを従属させ、覇権を得たラルフと、彼にその地位を与える共謀者たちがこうして出来上がる様子を跡づけている。

覇権的地位は常に争われるものであるというコンネルの説明の通り、ラルフの覇権に挑戦してくるジャックという存在も当初から準備されている。法螺貝の音を聞いてラルフの所に来た時には、ジャックは既に聖歌隊メンバーを率いており、「大きい子たち（“biguns”）」だけをカウントすれば、実はジャックの仲間の方が最初から規模は大きい。「最も明らかかなリーダーはジャックだった」（24）にも関わらず、少年たち全員の挙手による投票でラルフがチーフになると、聖歌隊メンバーたちも拍手を送る。ジャックの顔が怒りで赤らむのを見ると、ラルフは「何かを差し出したくなり」、ジャックの支配圏を侵す意図はないことを示すため、「もちろん、聖歌隊は君のものだ」（24）と譲る。他者の支持というものは、覇権を実現させる共謀者の入手に他ならない。ジャックは共謀者を奪われたことに怒り、ラルフはそれを返却することで宥和した。ラルフはジャックに特別な配慮を約束し、ジャックはその見返りとしてラルフの指揮下に入るというギブアンドテイクが行われていることが窺える。野蛮と文明のように対置されてきた2人の人物だが、人間の関係性を把握し、構築するための同じ文法を共有していることが示されている。

しかし、こうして何とか達成された調和は短命である。チーフを決めた後、2人は年下のサイモンを連れ、果たしてこの場所が本当に島なのかどうか、確認のための探検に出ている。島の端まで到着すると、岩場の獣道を辿って山に登り、頂上付近にあった大岩を協力して落下させ、その破壊力を目の当たりにし、轟音に聞き入る。冒険は「輝く目の厳粛な交歓」（29）とされ、頂上から壮大な大自然を見渡した際には、「目は輝き、口は開いたまま、意気揚々と彼らは支配権を堪能した。気持ちが高揚し、彼らは友人となった」（32）と描写される。結束して困難に立ち向かう中で育まれる真の友情というロビンソネード・ジャンルの主題がこうして繰り返されるが、『蠅の王』はこのジャンルに対するアイロニーであり、下山の途、まだ第1章のうちにこの調和には亀裂が入り始める。

空腹に襲われて下山する3人は、途中でつる草に絡まって身動きが取れなくなっていた仔豚に出くわすが、ジャックは振り上げたナイフを下ろすことができず、逃してしまう。彼は「刺す場所を決めるのに一瞬時間がかかっただけなんだ」と言い募り、3人は「恥じ入って笑った」。「なぜやらなかったのか」（33）とラルフは問うが、語り手によれば、「彼がやらなかった理由を、彼らは重々承知していた。生きている肉体にナイフが振り落とされ切り込んでい



くことの重大さ、耐えようのない出血のためだ」(34)と説明される。生き物の命を奪うことへの恐怖は3人が共有するものであったのに、あえて「なぜ」と問うラルフは、自分も同じ恐怖を感じていたことを否認しているのであり、この問いを発することは、恐怖したという恥辱をジャックだけに押しつける効果を持つ。海辺の集会の場で発効した宥和に基づく2人の関係性は実に不安定なものであることが示され、この問いを受けて湧き上がる「次は容赦しない」(34)というジャックの誓いには、恥辱によって固められた彼のこれからの方向性が示されている。

以後、優劣を競い合うラルフとジャックの不安定な関係が続いていくが、決裂を決定づけるのは、豚狩りに執着するジャックが狼煙番の少年たちを引き連れて出かけた間に船が通りかかり、救出の機会を逃す結果になったことだった。この出来事と時を同じくして、狼煙を炊いていた山頂にパラシュート兵の死体が落下しており、風に煽られて動くその姿が、少年たちの中で大きく膨らんでいた「獣」の存在に実体を与え、恐怖も最大限に膨らんでいた。ハンターたちは獣とも戦うことができると主張するジャックに対し、ラルフは溜め込んでいた彼らに対する怒りを爆発させ、「棒で武装した子供たち」(138)に過ぎないと発言してしまう。怒ったジャックは会議を招集し、「ラルフはチーフであるべきではないと思う者」の評決を試みるが、手を上げる者はおらず、「両目の端から屈辱の涙を流し」ながら、「もう遊ばない。お前らとは」(140)と言い残して去っていく。敗北したかに見えたジャックだったが、残った少年たちは、新しい狼煙のための木を集める間に徐々に人数を減らしていた。海辺の外れに場所を移していたジャックのグループは豚を狩り、ラルフのグループに「俺たちは狩りをして、たらふく食って楽しむ。俺の部族に入りたければ、来て見てみろ」(155)と誘いかける。この祝宴には、最終的にはラルフとピギーも参加し、クライマックスとなる狂乱の踊りがサイモンを殺害した集団的暴力の場となる。

ヘゲモニック・マスキュリニティの概念づけにおいて、コンネルは「覇権とは、ある集団が社会生活の中で主導的地位を主張し、維持する文化的ダイナミズム」であり、「いつの時代でも、ある種の男性性が文化的に高く評価されてきた」と説明していた。これに照らせば、この時点までに島の少年たちの文化にはヘゲモニーの転換が起こっていたと考えられるだろう。肉食の誘惑に負けて敵地に赴いたラルフに、ジャックは「法螺貝は島のこっち側では無効だ」(166)と言い、ラルフの覇権を象徴した法螺貝は単なるモノに帰した。覇権を基礎づける共謀者の数という点でも、この場面の後、ラルフの元に残った大きい子はピギーと双子のサムとエリックのみになり、やがてピギーは殺され、双子は強制的に奪われて、最終的に彼は孤独な「追放者」(205)になり果てる。

しかし、ヘゲモニーは突然にして転換するものではない。救助を待つことを最優先にし、狼煙を燃やし続け、雨風をしのぐシェルターを建てることを決めたところで、そもそも少年

たちにはそれを実行できるだけの遂行力はなかった。それでも、少なくとも建前としてはそれを優先しようとする価値体系が存在していたと言えるだろう。それを体現するのがラルフだったが、集団の価値観の変化は、物語が進むにつれて顕発していく彼の思考力の喪失に確認することができる。パラシュート兵によって「獣」が実体化した後、「彼の思考の前でコウモリの翼のように何かはためき、彼の考えを遮った」（118）ことに始まり、上述のジャックの誘いの後にも「何か言いたいことがあったが、シャッターが降りてしまっていた」（156）。大きな子が自分も含めて4人だけになってしまった後にも、皆に向けて話している最中、「あのカーテンが頭の中でひらめき、何を言おうとしていたのか忘れてしまった」（180）。ラルフが忘れるのはいずれも、火や煙のこと、つまり救助を求める狼煙の意義と重要性である。救助を求めるための行動を最優先に置くという価値体系こそが彼をリーダーたらしめていたものであるが、時の経過とともにそれが揺らぎ、他ならぬラルフもまた集団の文化の変化に影響されていることを描き出している。

ここで第1章に見た少年たちの関係性に戻りたい。物語の冒頭で、少年たちが従属者を作り出し、覇権、共謀の地位に自らを配置したこと、そして覇権者にはそれに近い、挑戦者となり得る存在がいることを示した。ラルフが覇権を失っていく過程で、従属者と覇権を競う2名という三角形が再び構築されていくことに注目したい。ラルフが落ちていく一方で、新しく頭角を現してくるのが Roger である。ジャックはグループを去った後、豚狩りに出かけるが、追うだけでなく、豚の息の根を止めるところまで一緒に行ったのがロジャーだった。命懸けの豚の抵抗に、ロジャーが槍を深く押し刺していき、ジャックがナイフで喉をかき切つてとどめを刺すという2人の関係は、第1章でラルフとジャックの間に見られた「輝く目の厳肅な交歓」を彷彿とさせるものである。そして瞬間的な友情の最高潮を経験した2人の関係性がそうであったように、その後は小競り合いを繰り返し、エスカレートしていった様が想像される。ピギーの殺害時に、梃子に全体重をかけて岩を落としたのはロジャーであったし、その晩、夜の闇に紛れてこっそりと双子に会いにいったラルフに、双子はこう明かしている。

「ロジャーを知らないでしょ。彼は恐ろしい。」

「——それにチーフも——2人とも」

「恐ろしい」

「——でもロジャーは」（209）

ここで会話は途切れたが、双子はジャックよりもロジャーの方が怖いと感じていることを窺わせる。また、ジャックとロジャーのやりとりにも、地位の逆転を思わせるものがある。ピギー殺害後にラルフを逃し、怒ったジャックはロジャーに「なぜ見張りをしていないんだ」

と問うが、ロジャーは「ちょっとここへ来たただけだ」(201)と顔色一つ変えずに答え、ジャックは彼の挑発的な態度を前に言葉を返すことができない。「絞首刑執行人の恐怖が彼にまわりついていた。チーフは彼にそれ以上は何も言わず、サムネリックを見下ろした」(201)と語られ、怒りの矛先が弱い者の方へ向けられたこと、つまりジャックが既にロジャーの好敵手ではなくなってきたことが仄めかされている。

当初のピギーに当たる従属的マスキュリティの地位には、今度はラルフが当てられることになる。最終的に孤独な「追放者」になるまでの軌跡を振り返れば、その過程が明らかになるだろう。パラシュート兵の死体で実体化された獣を確認に出た道すがら、日暮れの時間を考慮し、山へ行くことに躊躇を示すラルフに対し、ジャックは「ピギーに何か起こっちゃいけないだろう？」(129)、「居住地に戻ってピギーと話す方が良いか？」(130)と、しきりにラルフとピギーが友情を超えた親密な関係を結んでいるかのように問うている。語り手は、最初の問いが「妙な、こわばった声 (a queer, tight voice)」(129)で発せられたと説明するが、ここに“queer”の語を置くことで、2人の関係を同性愛化しようとするジャックの意図を明確化していると考えられる。そして、最終的にラルフのグループから出て行く際の会議では、「彼はピギーみたいだ。ピギーのようなことを言う」(139)と述べ、ゆえにリーダー不適格だと主張する。同性愛あるいは女性性との近接が従属的マスキュリティの定義であったが、こうしてラルフはピギーと重ね合わされることによって従属の地位に貶められていった。

1人を排除することで集団のまとまりを創出し、その上で覇権者と共謀者を構築するという最初に見た構図は、ここに来て健在であることが明らかである。憎悪し、軽蔑しながらも決して手放してはくれない関係性の力学を感じ取り、ラルフは「彼とジャックの間には、あの名状しがたい繋がりがある。それゆえに、ジャックは決して彼を放っておかない。決して」(203)と感じているが、それは「追放者」もまたマスキュリティーの体制の内部であり、構造的他者に過ぎないからである。当初ピギーに向けられた人格否定や暴力に比べ、ラルフは命を狙われており、そのエスカレートぶりは凄まじい。しかし、このエスカレートぶりこそが、新しい覇権集団の内実を物語るものである。ジャックのグループでは、既に集団の内部でも暴力による支配が始まっている。彼の命令で Wilfred を縛り上げ、そのまま何時間も放置されていることを、Robert は「興奮して笑いながら」(176)話しているし、また、ラルフは双子との密談を誰かが近づいてくる音によって中断された後、身を隠した茂みの中で、サムとエリックの痛ましい叫び声を聞いている (210)。暴力が連鎖し、増幅していくおぞましい共同体だが、覇権の獲得は正義や公正さとは別問題であること、共謀者たちを繋ぎ止める力は、暴力や脅迫、恐怖心でもあり得ることを示している。

覇権を競い挑戦し続けるマスキュリティーの体制は、より大きなジェンダー体制の中にあるものであり、再びコンネルの定義に戻れば、「男性の支配的地位と女性の従属を保障する」

ことがその前提にある。とすれば、『蠅の王』の中で唯一女／雌である豚が転身した蠅の王についても検討する必要があるだろう。蠅の王の女性性に着目した杉山洋子は、以下のように論じている。

この島の主は豚たちであり、大きい母豚は島の女王であったろう。多産な豚は豊穡の象徴であり、古代ギリシャ人やケルト人にとって聖獣であった。木々や岩と同じく、野豚は島の自然だった。タイトルの「蠅の王」の奥の奥には案外そういう意味も隠れているのかもしれない。サイモンが対面した豚の頭はこの雌豚の頭だったのだし、旧約のベルゼブブも遙かな昔、異教の豊穡神だったという。(13)

少年たち到来以前の大自然の中の豚は、人間にとっては自分たちの命を繋ぐための尊い神でもあり、そういった位置づけがハンターたちの暴虐を浮き彫りにしている。切り取られ、槍で串刺しにされ、血を滴らせて無数の蠅を呼び寄せている豚の頭は、確かにそういった効果を持つが、本論では蠅の王が女であるということに加え、それにも関わらず、被害者の声を持ってはいないということに注目したい。獣に対する恐怖を膨らませていく少年たちの中で、サイモンは唯一、獣がいるとすればそれは「僕たち自身に過ぎないのかも」(97)と曇りのない目で見ていた。以下は、そのような冷静さを保つサイモンに向けられた言葉である。

蠅の王は校長のような声で話しかけた。

「行き過ぎた行為だ。私の不憫な、間違った子供よ、お前は私よりも頭が良いとでも思っているのかい？ 警告しておくよ。私は怒るよ。分かるかい。お前はお呼びでないだ。この島では、楽しむんだ。楽しむんだ！ 態度を改めなさい、さもなければ——」(158-59)

少年たちが繰り広げるマスキュリニティの覇権争いの中で狩られ、仔豚ともども命を失ったはずの彼女は、少年たちの生活を楽しめ、余計なことを言って邪魔をするなどサイモンに言い聞かせている。彼女は少年たちの行動を奨励、促進しているわけであり、マスキュリニティの体制維持の装置として機能している。Connellの概念が男性性だけでなく、ジェンダー体制の全体を捉えようとしたものであることは既に説明したが、ヘゲモニック・マスキュリニティの概念は当初、体制の中で覇権的男性性と対になる女性性、ヘゲモニック・フェミニニティを立てていた。後に「家父長的なジェンダー秩序における男性性と女性性の非対称な位置づけを明確にするために、「強調された女性性」と改名された」(Connell & Messerschmidt 848) もの、男性とマスキュリニティの研究が進む中、焦点から外れていったという。女としての豚は、ヘゲモニック・マスキュリニティの地位を争うジャックとロ

ジャーによって殺され、征服された。征服され、支配を受ける者の象徴として、蠅の王は支配者の言説を繰り返し、強制し、体制維持を積極的に支えることで、例え僅かにでも家父長制の配当を得ようとするヘゲモニック・フェミニニティを体現していると解釈することができる。

ヘゲモニック・マスキュリニティの概念から読む時、『蠅の王』の少年たちは、寓話的で一元的な性格づけを抜け出し、複数のマスキュリニティーズの間に取り交わされる関係性の中で動き、そして変化し始める。多数の少年にとっては、従属的存在を作り出し、共謀的存在となることが保身であり、その時々へのヘゲモニーに行動や信念すらも染めていく様子が描き出されている。覇権に近い者たちは、相手を出し抜くための差異化に躍起になり、事の善悪の判断は忘れ去られ、エスカレートさせていく。そして常に、ラルフが経験したように、いつ何時、自分が従属的存在に落とされるか分からないという恐怖に取り憑かれている。サイモンが「僕たち自身に過ぎないのかも」と考えた「獣」は、少年たちの内部に入り込み、少年たちを駆り立て続ける、男性性のジェンダー制度であることをこの作品は十全に描き出している。とすれば、「人の心の闇」と呼ばれるものもまた、この体制によって生み出される人間の心なのではないか。

この作品の希望はラルフにあることは間違いないが、それは彼が1人、文明を体現する人物だからではない。海軍士官の登場によって命拾いしたラルフは、ピギーを「真の、賢明な友人」と認識した。先に見た通り、この作品はピギーを従属的地位に落とし込むことで絆を深め、互いに力を認め合うライバルの「輝く目の厳粛な交歓」を「友人」関係と定義していた。その友情の行き着く先を身をもって経験したラルフが、この名称を改めてピギーに与えたという事実は、彼が自省を余儀なくされ、マスキュリニティの体制から距離を置き、批判的に見る視座を獲得したことを表していると言えるだろう。この意味で、この作品はラルフのビルドゥングス・ロマンであり、希望はそこにあると言える。

教師として「小さな少年たちと長年を過ごし、彼らを実に正確に理解し、知っていた」(“Fable” 41) というゴールドディングは、言葉を変えれば、少年たちの行動規範として働くマスキュリニティの体制を熟知していたということだ。アリディーニは、この作品は「特定のパターンのマスキュリニティ」(217)の批判的描写を行っている指摘しているが、作品が批判するのはマスキュリニティの特定の類型ではない。複数のマスキュリニティを的確に配置し、相互の関係性から生じる動きを捉えるのみならず、蠅の王をヘゲモニック・フェミニニティのシンボルとして据えることで、作品の射程は、家父長制を支えるジェンダー体制の全体に及んでいると言える。

Works Cited

- Alidini, Stefan. "The Masculine Code: Structures of Masculinity in William Golding's *Lord of the Flies*." *Belgrade English Language and Literature Studies: BELLS90 Proceedings*. Volume 2 (2020): 213-27.
- Baker, James R. "Golding and Huxley: The Fables of Demonic Possession." *Twentieth Century Literature*. 46. 3 (2000): 311-27.
- Bufkin, E. C. "Lord of the Flies: an Analysis." *The Georgia Review* 19.1 (1965): 40-57.
- Buis, Hillary. "Lord of the Flies Gets a Girl Power Makeover in the Wilds." *Vanity Fair*. Condé Nast, 10 Dec. 2020. Web. 18 Jul. 2022.
- Connell, R. W. *Masculinities*. 2nd Ed. Berkeley: U of California P, 2005.
- Connell, R. W. and James W. Messerschmidt. "Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept." *Gender and Society*. 19.6 (2005): 829-59.
- Golding, William. *Lord of the Flies*. London: Faber and Faber, 1954.
- . "Lord of the Flies as Fable." Clarice Swisher, ed. *Readings on Lord of the Flies*. San Diego: Greenhaven P, 1997. 40-46.
- McCrum, Robert. "The 100 Best Novels: No 74—*Lord of the Flies* by William Golding (1954)." *The Guardian*. The Guardian News and Media Limited, 16 Feb. 2015. Web. 15 Jul. 2022.
- Okuhata, Yutaka. "The World of Fragility: Victimizations and Persecutions in Golding's *Lord of the Flies* and Other Early Works." 『比較文学・文化論集』 31 (2014): 1-14。
- Sugimura, Yasunori. "Self-Destructive Community and the Improbability of War in *Lord of the Flies*." *Studies in English Literature*. English Number (1994): 47-64.
- 北岡一弘 「"Darkness of Man's Heart": 戦争文学としての『蠅の王』」 『テキスト研究』7 (2010): 34-46。
- 小林亜希 「『蠅の王』におけるアイロニー — 語りとアレゴリーの時間性 —」 『英文学研究』 支部統合号4 (2012): 115-22。
- 杉山洋子 「鳥と野獣—『蠅の王』を読む—」 『人文論究』 38.4 (1989): 1-16。
- 鈴木敬子 「William Golding: *Lord of the Flies* における内なる悪と楽園喪失について」 『英米学』 17 (1982): 29-51。
- 高本孝子 「*Lord of the Flies* におけるリアリズムとアレゴリーの融合」 『水産大学校研究報告』 47.1 (1998): 31-42。

## Reading *Lord of the Flies* through the Lens of “Hegemonic Masculinity”

UTSU Mariko

The place *Lord of the Flies* has established in the popular culture remains unshakable half a century after the publication of William Golding's original work. As a work of literature, however, the academic interest in it has peaked in the 1960s and it was soon labeled a simple and transparent piece appropriate for secondary school children. Furthermore, in a lecture he gave in 1962 Golding thoroughly delineated the work's genre and theme, which seems to have hindered the emergence of new perspectives in a large part.

This paper first shows how two major directions of traditional discussions — examination of the structure of the fable/allegory and analyses of the signs, symbols and ironies — collide with each other at a certain point. It then moves on to incorporate R. W. Connell's conceptual model of “hegemonic masculinity” to see the boys on the move not as unchanging embodiments of certain aspects of human beings. Modeling on Connell's concept, this paper places the boys into hegemonic, complicit and subordinate masculinities and examines how they change their places in the course of the story while the basic relational positioning of masculinities remains intact. The hegemonic femininity, a twin concept Connell coined at an early stage, also gives an interesting perspective to interpret the *Lord of the Flies*. Looked through the lens of “hegemonic masculinity,” *Lord of the Flies* presents itself as a remarkable critique of the gender system.